住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査業務

横　塚　古　墳　群

――方八町・横塚地区遺跡確認調査報告書――

令和７年２月

郡 山 市 教 育 委 員 会

序　　文

郡山市は、福島県のほぼ中央に位置し、豊かな自然に恵まれ、その地理的特徴から、原始・古代より交通の結節点として東西南北から、さまざまな地域の文化が集まり、それらを礎として多様な文化が形成されてきました。

文化財は、地域の歴史や文化を理解する上で欠くことのできないものであり、地域文化の向上・発展の基礎となるものであります。その中でも、埋蔵文化財は文字の無い時代や文献資料の少ない地域の歴史や文化を解明するための貴重な資料です。

郡山市教育委員会では、本市の歴史や文化を解明する貴重な財産である埋蔵文化財を後世に遺し、継承していくことが現代に生きる私たちの大きな責務であるとの認識のもと、埋蔵文化財の保存と活用に努めているところであります。

この度、確認調査を実施した地点は、確認調査必要地区の方八町・横塚地区に該当しています。試掘調査の結果、古墳の周溝が検出されたため、詳細調査を実施しました。横塚古墳群については、昭和５年に福島県が発行した『福島県史跡名勝天然記念物調査報告 第５』に「横塚字前田の圓墳があり」との記載はありますが、正確な位置の把握はできていませんでした。今回の試掘調査並びに遺跡確認調査により古墳の周溝が確認でき、かつ、隣接する神社に墳丘が確認できたことから、福島県の報告のように古墳が存在していたことが確認できました。現在、住宅や商業施設が立ち並ぶ等開発が進んでしまった地区ではありますが、今後も確認調査必要地区での調査を進めて現存している範囲を確認してまいります。

本書は、発掘調査の成果を周知し、活用できるように後世に残す記録としてまとめたものであります。今後、地域の歴史解明の基礎資料や研究資料として、広く皆様に活用していただきますとともに、埋蔵文化財の保存と活用について御理解をなお一層深めていただければ幸いに存じます。

結びに、発掘調査実施から報告書作成にあたり、御尽力を賜りました関係各位の皆様に敬意を表しますとともに、心から感謝を申し上げ序文といたします。

令和７年２月

福島県郡山市教育委員会
教育長　小　野　義　明

調　査　要　項

遺　跡　名　横塚古墳群（よこづかこふんぐん）
所　在　地　福島県郡山市横塚一丁目80番２・81番１
契 約 期 間　令和６年８月９日～令和７年２月28日
発掘調査期間　令和６年８月13日～令和６年９月４日
発掘調査面積　250㎡
調査委託者　郡山市（市長 品川萬里）
調査主体者　郡山市教育委員会（教育長 小野義明）
調査担当者　公益財団法人郡山市文化・学び振興公社（代表理事 浜津佳秀）
事　務　局　郡山市文化スポーツ部文化振興課文化財保護係（係長 濱田暁子）
調　査　員　垣内和孝
調査補助員　菅田義克
業務従事者　垣内　菅田　今泉淳子　上田美紀　遠藤嘉一　関根寿夫　塚原譲　橋本志津
山田秀和　吉田イチ子
調 査 協 力　熊野福蔵神社　大和ハウス工業株式会社
小熊博治　吉田孝一　渡邉孝司（敬称略・順不同）

例　　言

１．本書は、福島県郡山市横塚一丁目に所在する横塚古墳群の住宅建築に伴う記録保存を目的とした遺跡確認調査の報告書である。
２．発掘調査および整理報告に関わる費用は郡山市が負担した。
３．本書は、公益財団法人郡山市文化・学び振興公社文化財調査研究センターが編集し、郡山市教育委員会が発行した。
４．本書の執筆は、１・３～６を垣内和孝、２を郡山市文化振興課文化財保護係の荒木麻衣が行なった。
５．遺構・遺物の図面作成は垣内和孝・菅田義克・今泉淳子・吉田イチ子が行なった。
６．遺構・遺物の写真撮影は垣内和孝が行なった。
７．調査に関わる記録・資料および出土遺物は郡山市教育委員会の保管である。
８．本書の作成にあたり、郡山市教育委員会発行の遺跡発掘調査報告書のほか、以下の文献を参照した。

垣内和孝「郡山市富久山町福原「中田館跡」から考える豪族居館・有力古墳と地域」
『郡山地方史研究』第52集 令和４年
岩磐史料叢書刊行会編『岩磐史料叢書中巻』歴史図書社 昭和46年復刻
福島県編『福島縣史蹟名勝天然記念物調査報告第五 福島縣に於ける古墳分布の状態』
福島県 昭和５年

目　　次

序　　文
調査要項
例　　言
目　　次

1．位置と概要 …… 1

2．調査に至る経緯 …… 6

3．調査の経過と方法 …… 6

4．遺　　構 …… 7

5．遺　　物 …… 13

6．まとめ …… 14

写真図版
報告書抄録

１．位置と概要

郡山市の中心市街地に含まれる横塚には、横塚二丁目遺跡（第１図①）のほかに周知の遺跡は登録されていない。周辺の芳賀や方八町などにも周知の遺跡は未登録である。しかし、これらの範囲に横塚二丁目遺跡以外の遺跡が存在しなかったとは考え難い。早くから開発が進展したため、遺跡の把握が進まなかったと解釈するのが自然である。郡山市では、遺跡の空白域ともいえるこれらの範囲に、「確認調査必要地区」の１つとして「方八町・横塚地区」を設け、未発見の遺跡の把握に努めてきた。本書で報告する横塚古墳群は、住宅建築に先立って実施した試掘調査で確認できた遺跡である。ただし、昭和５年（1930）刊行の『福島縣史蹟名勝天然記念物調査報告第五 福島縣に於ける古墳分布の状態』には、「郡山市大字横塚字前田」に「圓墳」の存在が明記されており、二本松藩の地誌で、天保12年（1841）に完成した「相生集」は、横塚村に「古墳」の項目を立て、「管玉・勾玉を掘出せし事あり、こゝも往古貴人を葬りたる処と見えたりと旧事考に見ゆ、土人地名を塚壊といへり、是即横塚の名の起りたる故なるべし」と記す。横塚古墳群は、両書にみられる古墳の可能性が高い。

第２図に示した昭和23年（1948）撮影の空撮写真にみられるように、横塚古墳群は阿武隈川により形成された低位段丘の縁に立地する。東側の低地には旧河道の痕跡を見て取ることができ、阿武隈川の氾濫原であったとわかる。段丘の縁が複数個所で円弧状となるのは、旧河道により削られた結果であろう。宅地や畠が南北に続く段丘の縁は微高地であり、その西側には湿地が広がっていたとみられる。

今回の調査では、古墳１基と土坑７基がみつかり、土師器と縄文土器・石器が出土した。古墳は墳丘径約11ｍの円墳で、古墳時代前期の築造と思われる。調査区の北に隣接する熊野福蔵神社の境内にも、墳丘径が12ｍほどの円墳が現存し、調査した古墳とあわせて古墳群を形成する。調査した古墳を１号墳、神社境内の古墳を２号墳とした。１号墳は、つい最近まで墳丘の一部が残存していたが、隣接の住宅を解体する際に未調査のまま削平された。近隣住民の聞き取りによれば、２号墳もかつては神社社殿の辺りまで墳丘が続いていたとのことで、第４図の地形測量図にもその痕跡がうかがえる。２号墳は、小規模な前方後円墳かもしれない。古墳群を造営した集団の居住域が近くに存在したはずであり、南方の芳賀から方八町にかけて続く広い微高地はその候補地である。周辺の低地を開発する集団が古墳時代前期に現れ、その墓域として横塚古墳群が造営されたのであろう。いまのところ２基のみの確認だが、さらに多く存在した可能性がある。縄文土器と石器の出土は、付近に縄文時代の集落が存在したことを物語る。みつかった土坑の多くは、形状や堆積土の様相から、縄文時代の落し穴と考えられる。

北方に約2.6㎞離れた場所には、古墳時代前期の集落がみつかった上之内遺跡（同図②）がある。また、その近隣の羽山神社が鎮座する小丘（同図③）を大型古墳と評価し、上之内遺跡の集落との関連を想定する見解もある。ここでも古墳時代前期に低地の開発が進められたと考えられる。この大型古墳の南西には、墳丘径約20ｍの円墳である小十郎壇古墳（同図④）が隣接し、陣場古墳群を形成する。横塚古墳群や陣場古墳群を造営した集団と同様に、低地の開発を志向したとみられる集団の墓域が、谷田川の東岸、河川改修以前は阿武隈川東岸沿いの宮田Ａ遺跡（同図⑤）でもみつかっている。

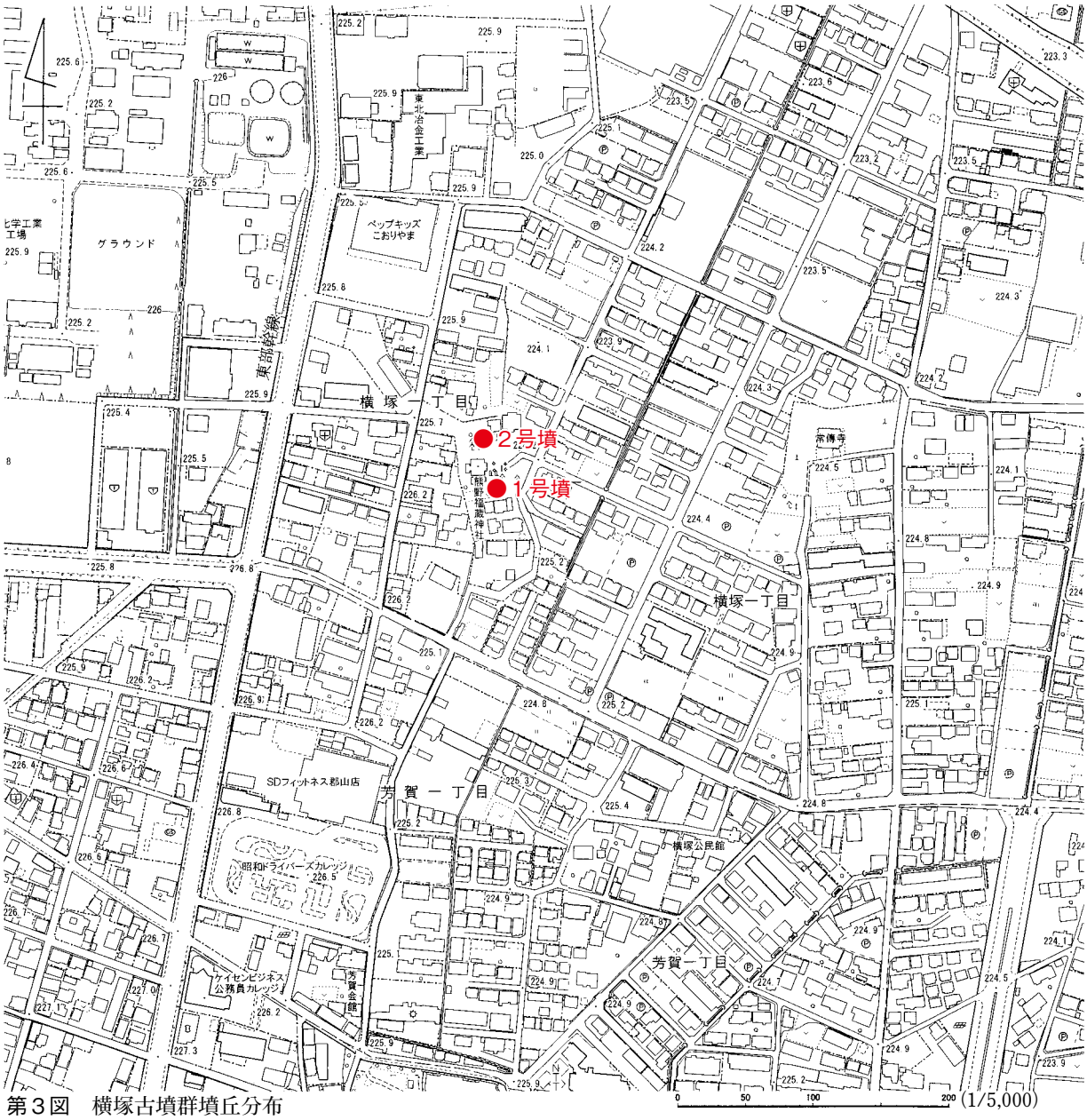
周辺における古墳時代中期の遺跡は少なく、西方の台地上に立地する清水台遺跡（同図⑥）が目立つ程度である。同遺跡では、台地の縁辺で方墳が、台地の内側の複数ヵ所で竪穴建物がみつかった。低地

第１図　横塚古墳群の位置

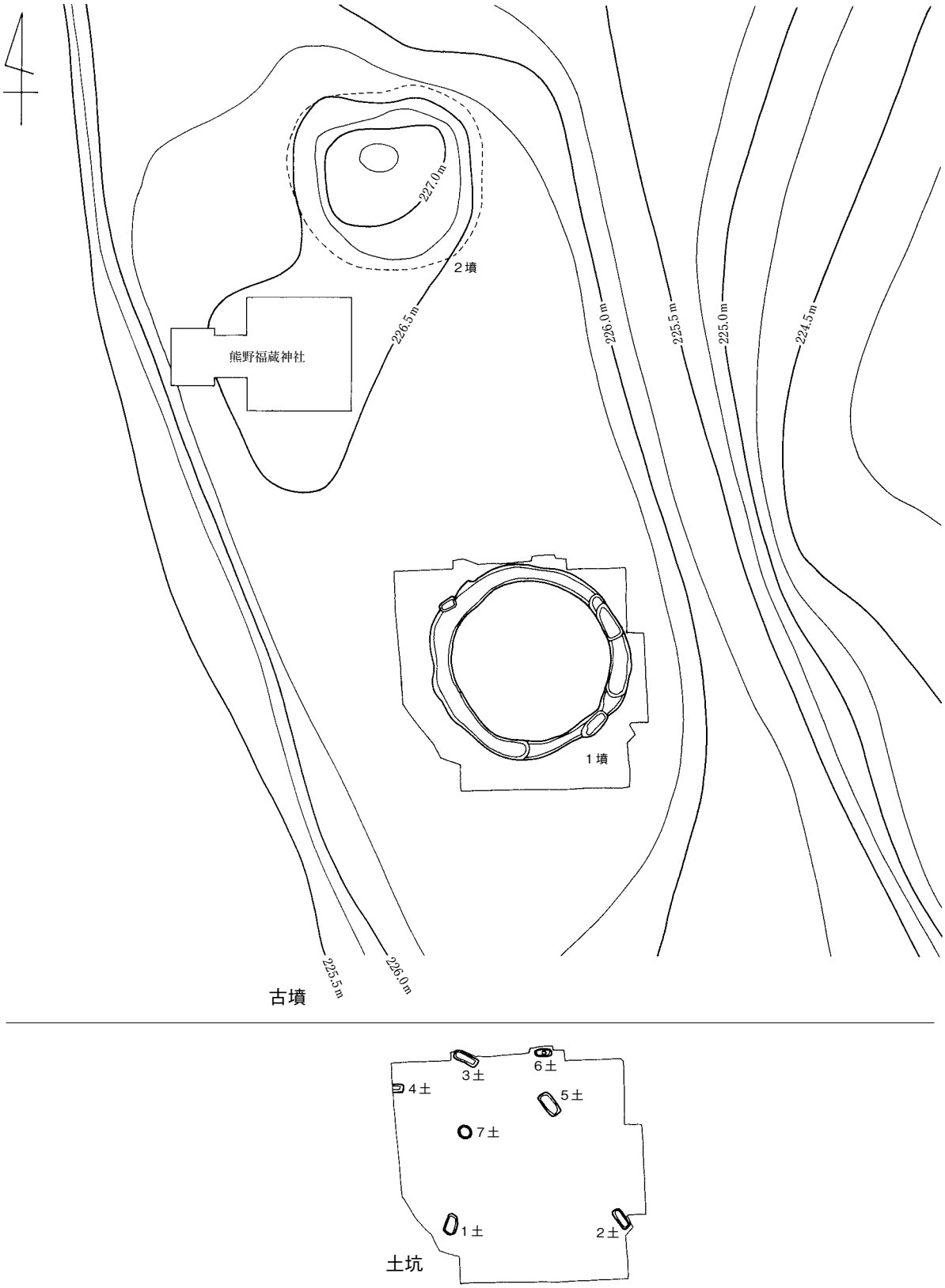
第２図　周辺の旧地形

での開発が頓挫し、生活域が台地上に変化した可能性がある。逢瀬川北岸の微高地上に立地する中台遺跡（同図⑦）では、小面積の調査ながら古墳時代後期の竪穴建物が１棟みつかっており、周辺に集落が広がっていたと考えられる。低地の開発が、再び進められるようになったのであろう。

台地上の清水台遺跡では、古代安積郡の郡衙の存在が明らかになっている。いまのところ、同遺跡の範囲内に、先行する直近の時期の集落は未確認である。主にこの点を根拠に、安積郡衙は古墳時代以来の豪族の本拠とは異なる場所に設置された「非本拠地型」と評価されている。ただし、古墳時代中期の清水台遺跡には墓域と居住域からなる集落があり、古墳時代前期の横塚古墳群の存在も明らかとなった。安積郡衙に直接的につながるわけではないにしても、横塚から芳賀・方八町、そして清水台にかけての地域に、これらの遺跡を存立させる潜在的な力が備わっていたことは疑いない。なかでも芳賀は、古代安積郡を構成する芳賀郷の遺称地名とみられ、未確認の拠点的集落が存在した可能性が高い。



第３図　横塚古墳群墳丘分布



第４図　周辺の地形と遺構分布

２．調査に至る経緯

確認調査必要地区の方八町・横塚地区内で開発の計画の相談があり、令和６年７月22日に対象となる開発区域737.8㎡に、トレンチを２本設定し、調査面積39.9㎡の試掘調査を実施した。

調査の結果、現表土面から10cmから45cmの深さで古墳の周溝を検出した。そのため、遺構が確認された範囲の614.83㎡を要保存範囲と判断した。

その後、埋蔵文化財包蔵地外の遺構の検出であったため、埋蔵文化財の新規発見に伴う詳細な調査が必要であることから現状保存が困難である範囲250㎡を発掘調査することとした。

これを受けて、遺跡確認調査及び原稿作成業務を令和６年８月９日付けで郡山市と公益財団法人郡山市文化・学び振興公社との間で委託契約が締結された。

３．調査の経過と方法

８月13日に現地での調査に着手し、調査対象地の草刈りと座標・標高の設置を行ない、翌14日には発掘調査で使用する機材などを搬入した。使用した座標値は、世界測地系平面直角座標第Ⅸ系である。座標値を基準に正方位の５ｍ方眼のグリッドを設定し、Ｘ:154,958,000、Ｙ:49,960,000の地点に設置した杭を起点に遺構を測量した。

お盆休み明けの19日、0.25㎥級のバックホーを使用して表土の除去を開始した。バックホーの運転業務は、株式会社市川建設に委託した。表土除去および排土の整形が終了したのは翌20日である。同日には作業員を導入し、人力による遺構検出を開始した。遺構検出面は、部分的に砂を含むローム質の明黄褐色土（10YR5/8）のＬⅡである。遺構検出および攪乱の掘削を23日まで行ない、円墳１基、土坑７基を確認した。週明けの26日、確認した円墳（１号墳）の周溝検出段階の写真を撮影し、その終了後に周溝の掘り込みを開始した。翌27日には、周溝の掘り込みと並行して土坑の掘り込みに着手した。

28・29日の両日、調査対象地が学区に含まれる郡山市立芳賀小学校の４・５・６学年の生徒・教員の見学があった。その他、連日のように近隣住民が見学に訪れた。調査終了後の10月１日には、同６学年の生徒を対象に、今回の調査成果を中心に、郡山市でみつかっている古墳の講話を行なった。今回の調査は、横塚を含む芳賀小学校学区で行なわれた初めての発掘調査であった。小学校による見学・講話の実現は、住民の多くの関心を得たことを象徴する出来事であった。

遺構の測量はトータルステーションを使用し、20分の１の縮尺で作図するとこを原則とした。写真はデジタルカメラで撮影した。おおむね調査作業が終了した９月３日には、ドローンによる空中写真撮影を行なった。空撮業務は、日本特殊撮影株式会社へ委託した。翌４日には、調査対象地の北側隣接地で確認した古墳（２号墳）を含む、周辺の地形を200分の１の縮尺で測量し、現地での作業を終了した。住宅建設工事の都合により、発掘調査区の埋め戻しは行なわなかった。

基礎的な整理作業は発掘調査中にも実施していたが、本格的には調査終了後に他の業務と並行しながら進めた。遺物の実測は原寸で行ない、トレースは製図ペンを用いた。遺物の写真はデジタルカメラで撮影した。

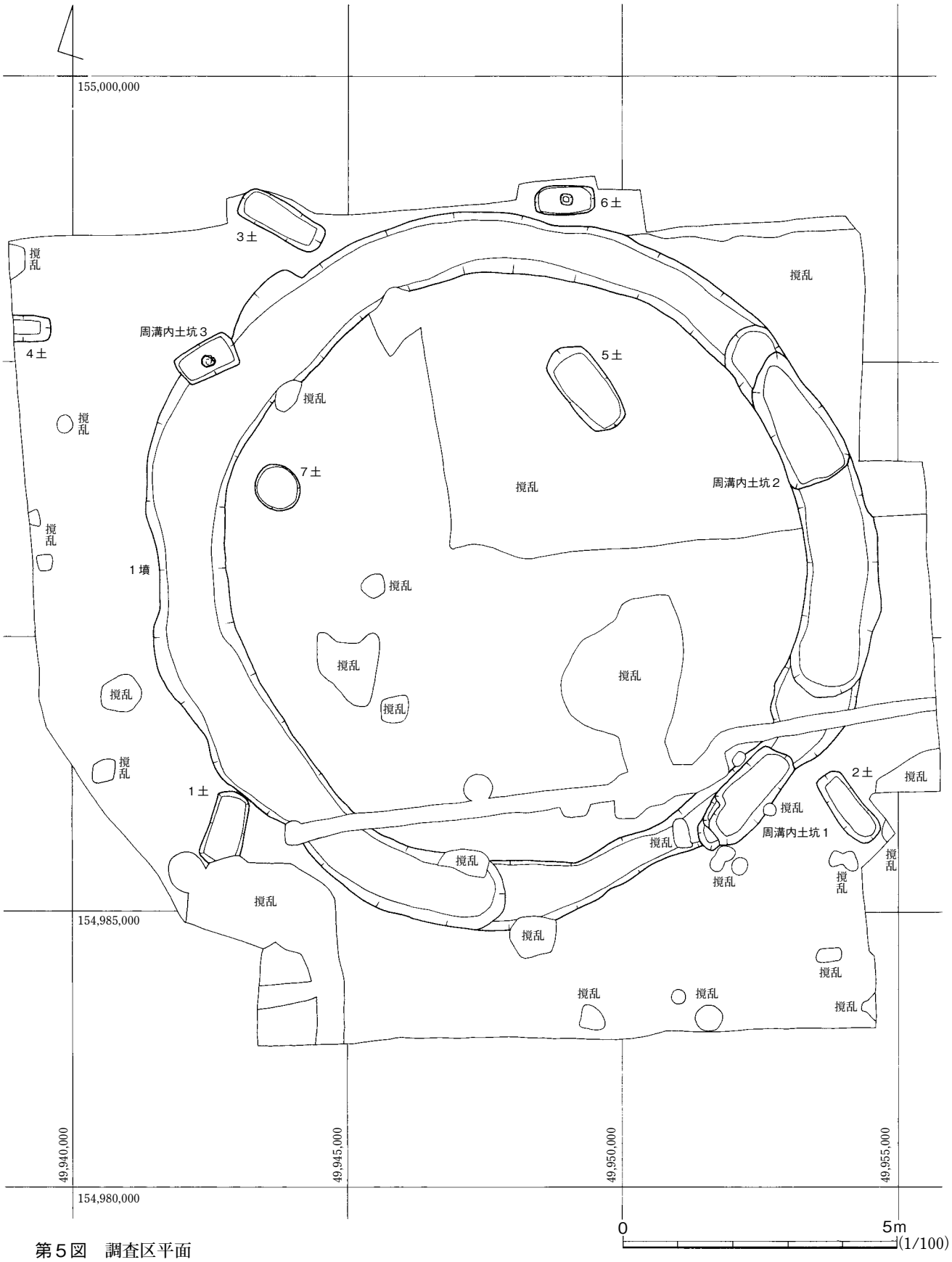
４．遺　構

発掘調査では、円墳１基、土坑７基と、円墳の周溝と重複する周溝内土坑を３基確認した。また、調査区の北側隣接地の神社境内に所在する古墳の墳丘とみられるマウンドの測量調査を実施した。以下、遺構の種類ごとに概要を報告する。

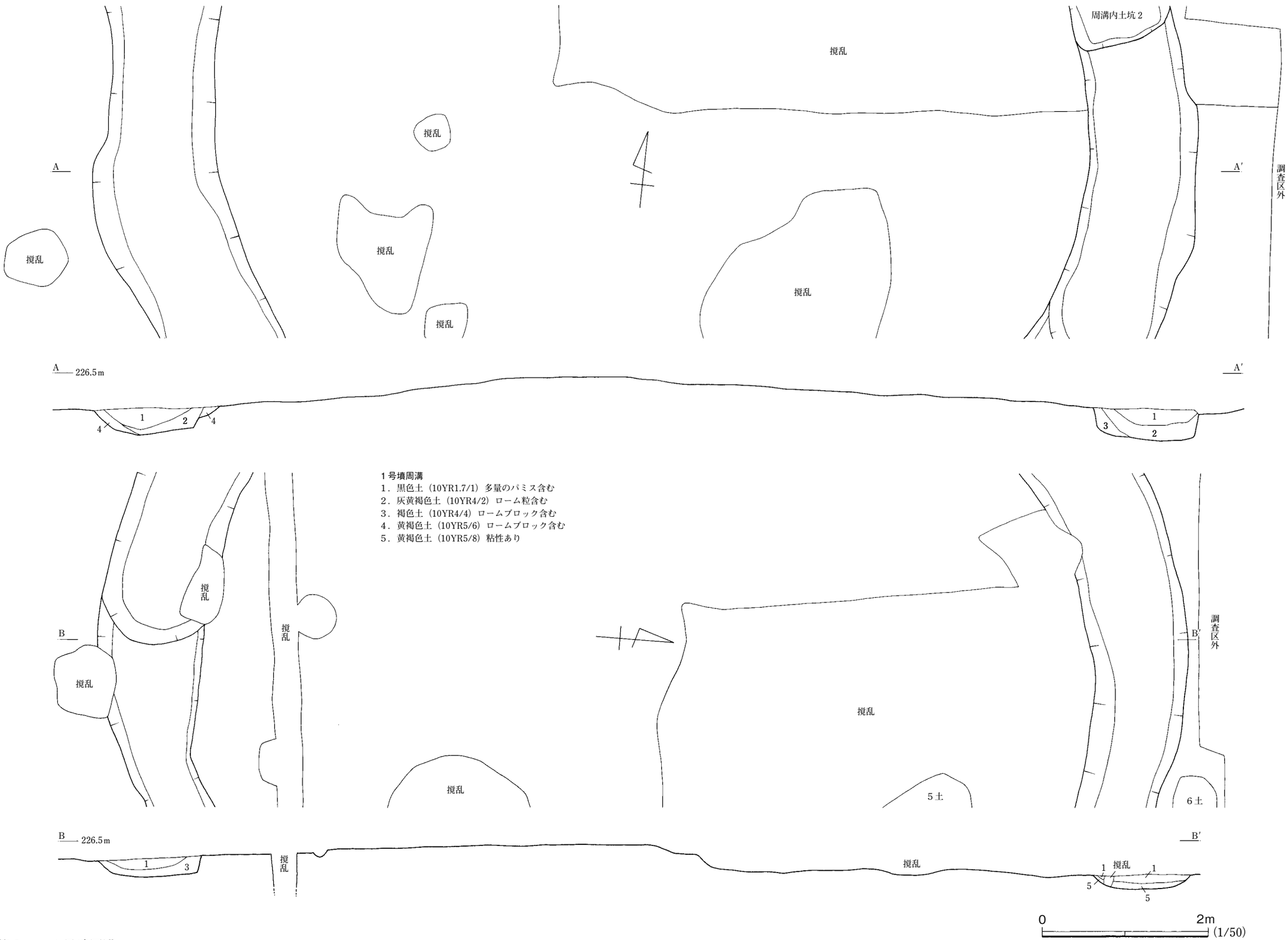
古墳　発掘調査した円墳を１号墳とした。規模は、周溝の内寸で径約11ｍである。調査時点で墳丘は削平されていたが、調査対象地にあった建物の解体前までは、この建物の北に隣接して墳丘の一部が僅かに残存していた。調査時点においても、この墳丘が残存した範囲は周りよりやや高くなっていた。周溝は全周するが、南東部では浅く、細くなる。周溝は自然堆積と判断でき、下層の墳丘側を中心に墳丘流土が堆積する。上層のℓ１とした黒色土には、ＦＰとみられる白色粒が多く混入する。ただしＦＰは純層を形成しない。第９図２～４の縄文土器、同図５の石鏃が周溝から出土したが、流れ込みであろう。神社境内には、径約12ｍの円形のマウンドが現存する。１号墳の存在を踏まえれば、古墳の墳丘と評価するのが自然である。現状では、墳丘上に砕石が敷きならされ、多くの石祠が安置されている。この墳丘を２号墳とした。２号墳の墳丘は、現在の社殿が建設される以前は、社殿のあたりまで続いていたとの聞き取りを得ている。地形測量でもその痕跡を示すと判断できそうなコンター線を認識できた。本来の墳丘は、南西方向にのびていた可能性があり、小型の前方後円墳かもしれない。

周溝内土坑　３基確認した。土坑１と３は、周溝検出時に黒色土を基調としたプランが見えていたが、土坑２については、周溝の掘り込み過程で初めて存在を認識した。土坑１と３の主軸が周溝のラインとずれるのに対し、土坑２の主軸は周溝のラインと一致する。土坑２の北と南の周溝は、他の部分より深く掘削されている。この点を重視すれば、土坑２とした落ち込みは、これと一連の造作であったかもしれない。土坑１と３は周溝の埋没途中に掘削されたと判断でき、周溝内の埋葬施設であった可能性がある。土坑３のほぼ中央上層のℓ１から、第９図１に示した土師器甕が正位の状態で出土した。同じく同図６の石匙が、ℓ５から出土した。

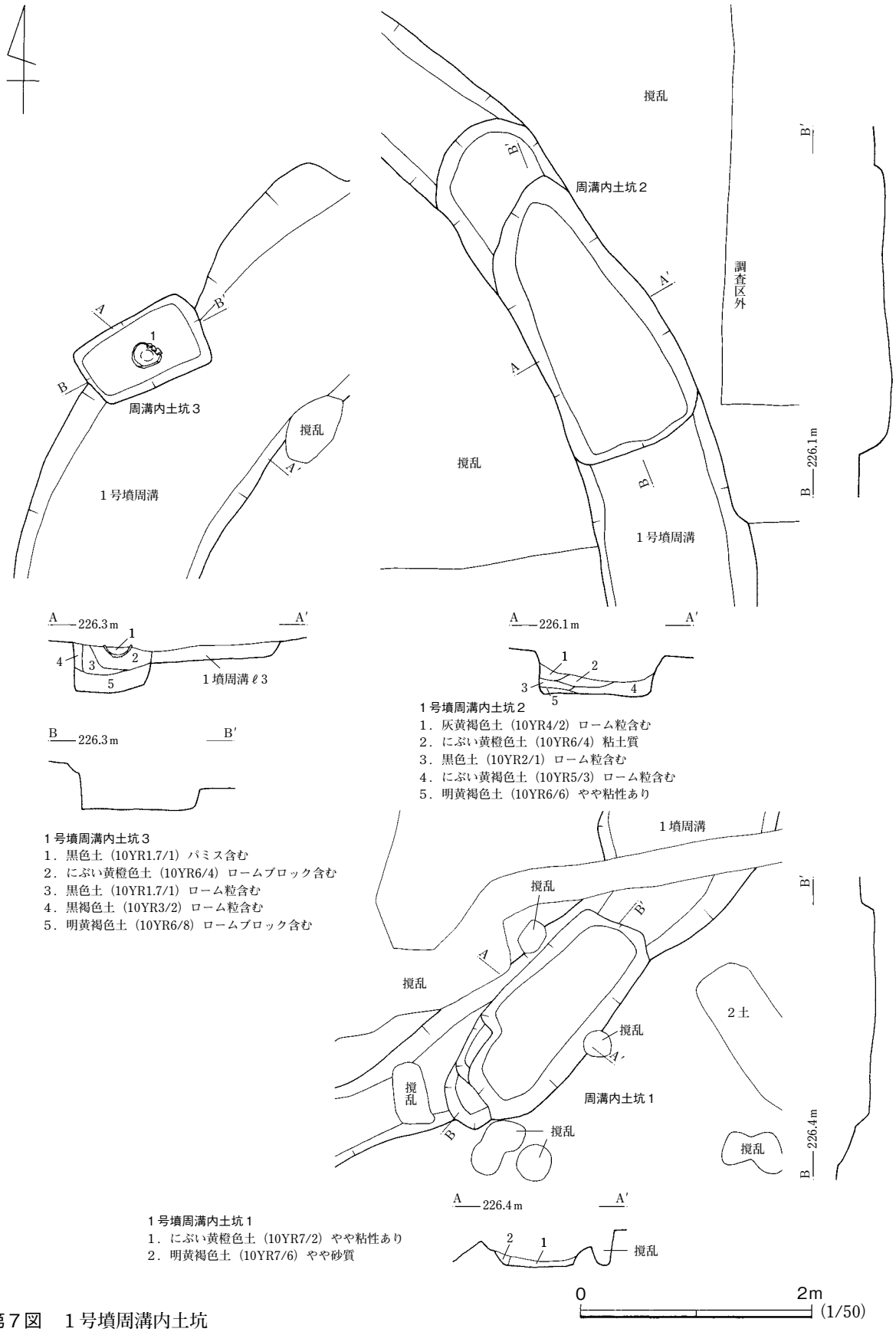
土坑　７基確認した。１～６号土坑は同様の形状で、長方形を基調とした平面で、壁の立ち上がりは急角度となる。１号土坑は他の５基と比較して深さが極端に浅く、削平の影響を強く受けているようである。堆積土の様相は、１・２・３・５号土坑が黄色系のしまりのある土壌で共通し、４・６号土坑は灰色から黒色を基調とした土壌が主体で、比較的類似した印象である。６号土坑の底面中央付近には、平面が方形を基調とした深い掘り込みがある。逆茂木などを設置した痕跡とみられ、狩猟用の落し穴と考えられる。他の１～５号土坑では底面に逆茂木の痕跡を確認できなかったが、掘方の形状が６号土坑と類似しており、同じく落し穴と考えられる。いずれの土坑も堆積土に人為堆積をうかがわせる様相は認められず、自然堆積と思われる。７号土坑は、平面が円形を基調とし、壁は急角度に立ち上がり、僅かだかオーバーハングする部分がある。上層堆積土のℓ１は流入土、ロームブロックを含む黄色系のℓ２は壁の崩落土、平面の中央が山形に高くなる最下層のℓ３は、ℓ２が崩落する以前の開口部が狭かった時点の流入土であろう。断面はフラスコ形を呈していたとみられ、貯蔵穴として使われたと考えられる。ℓ３から、第９図８の石核が出土した。落し穴と貯蔵穴と考えられる土坑は、いずれも縄文時代のものであろう。１号土坑からは、同図７の石匙が出土した。


155,000,000
154,985,000
154,980,000
49,940,000
49,945,000
49,950,000
49,955,000
6土
3土
4土
5土
7土
2土
1土
周溝内土坑3
周溝内土坑2
周溝内土坑1
1墳
撹乱
0
5m
(1/100)

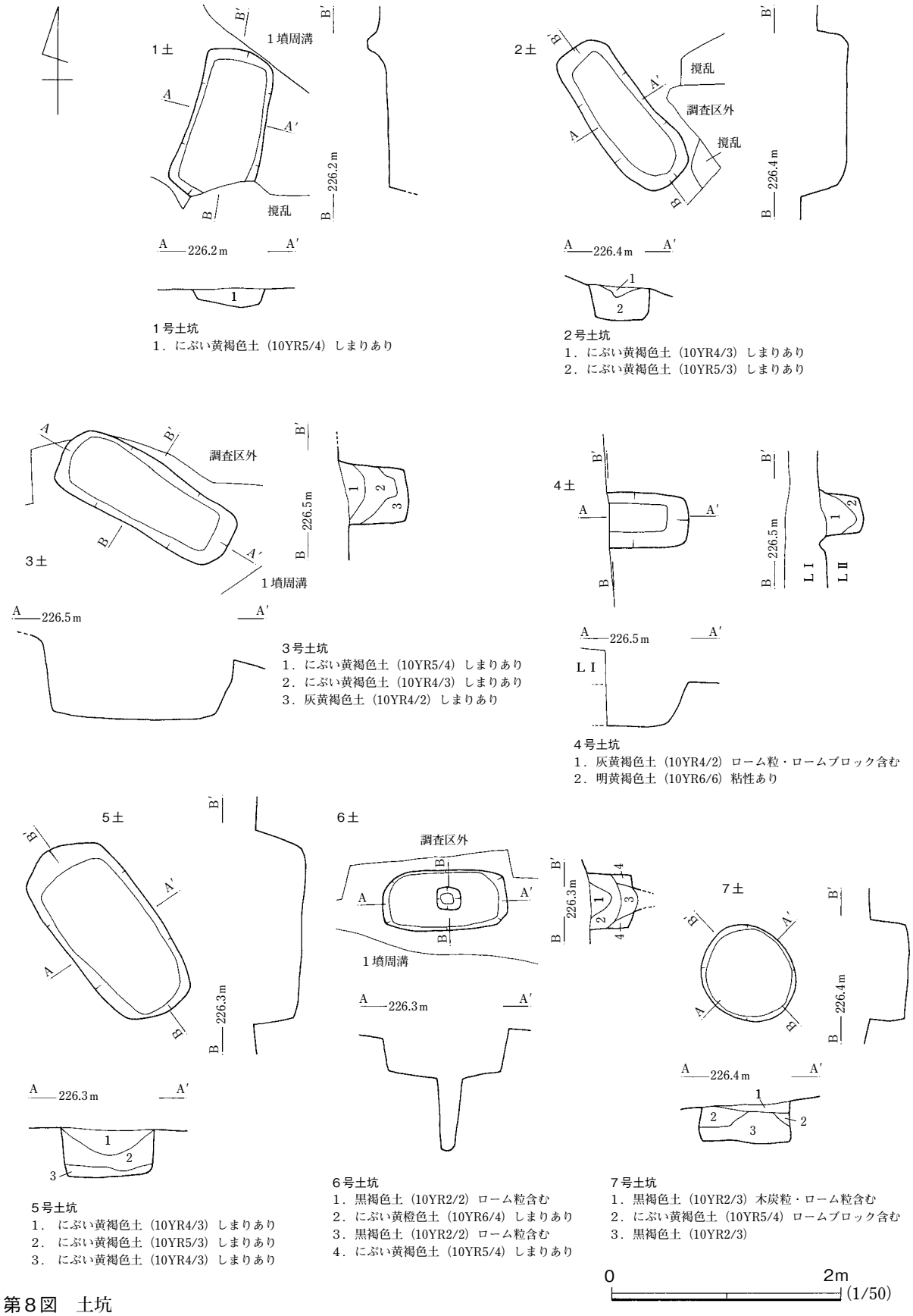
第５図　調査区平面


周溝内土坑２
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
A
A′
調査区外
A
226.5ｍ
A′
1
2
4
4
1
3
2
１号墳周溝
１．黒色土（10YR1.7/1）多量のパミス含む
２．灰黄褐色土（10YR4/2）ローム粒含む
３．褐色土（10YR4/4）ロームブロック含む
４．黄褐色土（10YR5/6）ロームブロック含む
５．黄褐色土（10YR5/8）粘性あり
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
B
B′
調査区外
5土
6土
B
226.5ｍ
B′
1
3
撹乱
撹乱
1
撹乱
1
5
5
0
2m
(1/50)

第６図　１号墳周溝



第７図　１号墳周溝内土坑



1号土坑
1．にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまりあり

2号土坑
1．にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまりあり
2．にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまりあり

3号土坑
1．にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまりあり
2．にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまりあり
3．灰黄褐色土（10YR4/2）しまりあり

4号土坑
1．灰黄褐色土（10YR4/2）ローム粒・ロームブロック含む
2．明黄褐色土（10YR6/6）粘性あり

5号土坑
1．にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまりあり
2．にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまりあり
3．にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまりあり

6号土坑
1．黒褐色土（10YR2/2）ローム粒含む
2．にぶい黄橙色土（10YR6/4）しまりあり
3．黒褐色土（10YR2/2）ローム粒含む
4．にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまりあり

7号土坑
1．黒褐色土（10YR2/3）木炭粒・ローム粒含む
2．にぶい黄褐色土（10YR5/4）ロームブロック含む
3．黒褐色土（10YR2/3）

0　2m（1/50）

第８図　土坑

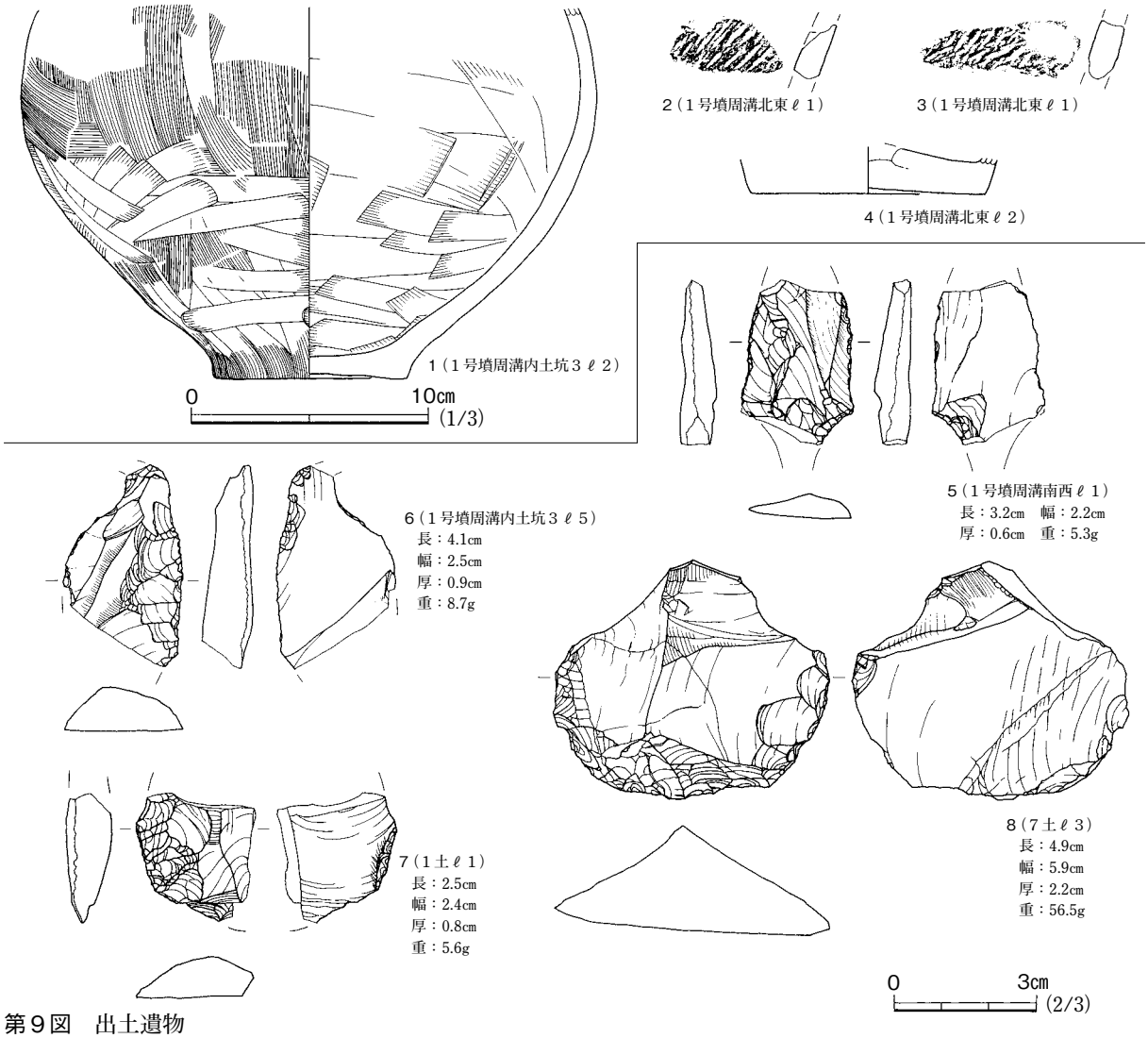
５．遺　物

遺構の内外から、土師器・縄文土器・石器およびその剥片などが出土した。遺物の出土量は少ない。８点を第９図に示した。以下、遺物の種類ごとに概要を報告する。

土師器　１とした甕１点を図示した。１号墳の周溝内土坑３のほぼ中央の上層から、正位の状態で出土した。下半部のみの遺存である。遺構の検出段階で一部が露出しており、削平に伴い上半部は失われたと思われる。胴部は球形で、外面には細かな斜め方向のハケメ調整が施され、内面は横方向のナデ調整を基本とする。焼成は不良で、断面はサンドイッチ状に内部が黒色を呈する。器形・調整の特徴によって、古墳時代前期のものと判断できる。

縄文土器　２～４の３点が出土した。比較的まとまって出土しており、同一個体と思われる。１号墳からの出土だが、流れ込みであろう。文様・器形の特徴が判然としないため、細かな時期は不明である。

石器類　５～８の４点が出土した。５は石鏃、６・７は石匙、８は石核である。１号墳出土の５・６は、流れ込みであろう。１号土坑の７、７号土坑の８は、いずれも土坑の時期を示すと思われる。



第９図　出土遺物

６．まとめ

今回の発掘調査は、郡山市横塚で実施した初めての発掘調査である。調査の内容は、上記に報告したとおりである。最後に、今回の発掘調査の成果を列記してまとめとする。

横塚周辺の地域は、早くから開発が進んだこともあり、これまで遺跡の把握が十分にできていなかった。そこで郡山市では、「確認調査必要地区」の１つとして「方八町・横塚地区」を設け、未確認の遺跡の把握に努めてきた。今回実施した試掘調査および発掘調査によって、横塚古墳群の存在が明らかとなり、「方八町・横塚地区」が遺跡の空白域ではないことが確かめられた。この点が、今回の調査の最大の成果である。同地区は、古代安積郡を構成する郷の１つである芳賀郷の遺称地名とみられる「芳賀」を含む。横塚古墳群の存在は、後の芳賀郷となる地域が、古墳時代にはすでに一定程度まで開発されていたことを物語る。

第２点は、古墳時代前期に築造された径約11ｍの円墳がみつかったことである。郡山市域には多くの古墳が存在するものの、大槻町や田村町といった東西の盆地縁辺に偏在する傾向がある。盆地の中央付近では、清水台遺跡でみつかった古墳や富久山町福原の陣場古墳群が目に付く程度であったが、今回の調査によって、新たな事例を加えることができた。横塚古墳群の存在は、古くは江戸期の「相生集」に記録され、昭和戦前期にも円墳の存在が知られていたが、その知見は後世に継承されなかった。今後は、試掘調査などで未確認の遺跡の把握を進めるだけでなく、見逃されてきた古文献の記事などにも注意を払っていく必要がある。隣接する熊野福蔵神社境内にマウンドがあることは、一部では知られていたものの、その性格は不分明であった。このマウンドが古墳であることは確実と思われ、１号墳とした円墳とともに横塚古墳群を構成すると評価できる。１号墳の発掘調査という機会を得て、今回このマウンドについても簡単な測量調査を実施した。その結果、現状では径約12ｍの円墳であると認識でき、２号墳とした。ただし、現在の社殿が建設される以前は、２号墳の墳丘は社殿のあたりまで続いていたとの地域住民の証言が得られ、測量図のコンター線にもその痕跡と評価できそうな様相が認められた。となれば、２号墳は小型の前方後円墳かもしれない。また、いまは墳丘の失われた古墳が、この２基以外にも存在したと思われる。横塚古墳群は、阿武隈川により形成された低位段丘の縁に立地する。同じ段丘面上には、古墳群を造営した集団の居住域が存在したはずである。古墳群南方の芳賀には平地が広がり、その候補地の１つである。横塚古墳群を造営した集団は、低地を開発するため、古墳時代前期にこの地に拠点を構えたのであろう。低地の開発を目的としたとみられる同様の拠点は、逢瀬川を挟んだ対岸の富久山町福原でもみつかっている。上之内遺跡の集落と、その墓域と思われる陣場古墳群である。陣場古墳群には大型古墳が含まれる可能性があり、小型の古墳を中心とした横塚古墳群とは属性が異なると思われる。両古墳群がどのような関係にあったのかは、興味深い検討課題である。

最後に第３点として、縄文時代の遺構と遺物がみつかったことがある。竪穴建物など、直接的に居住を示す痕跡こそ確認できなかったが、貯蔵穴とみられる土坑や複数の落し穴が確認でき、ごく少量ながらも縄文土器の破片や石器が出土した。調査対象地付近が縄文人の活動域であったことは間違いなく、近くに集落が存在したことがうかがえる。

写　真　図　版

調査区周辺（真上上空より）

調査区周辺(北上空より)

調査区周辺（南東上空より）

１号墳(真上上空より)

１号墳周溝検出状況・規模人物比較（西より）

１号墳周溝断面南部分（東より）

１号墳周溝断面北部分（東より）

１号墳周溝断面西部分（南より）

１号墳周溝断面東部分（南より）

１号墳周溝内土坑１（南西より）

１号墳周溝内土坑２（東より）

１号墳周内土坑３遺物出土状況（南西より）

１号墳周内土坑３（南西より）

１号土坑（南より）

２号土坑(南東より)

３号土坑(南東より)

４号土坑(東より)

５号土坑(南東より)

６号土坑(東より)

７号土坑(南より)

2024年３月撮影削平前１号墳墳丘(北より)

出土遺物

熊野福蔵神社境内所在２号墳現況（南より）

報　告　書　抄　録

書　　名	住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査業務 横塚古墳群 方八町・横塚地区遺跡確認調査報告書
編　著　者	垣内和孝　荒木麻衣
編　集　機　関	公益財団法人郡山市文化・学び振興公社文化財調査研究センター
所　在　地	福島県郡山市喜久田町堀之内字畑田23番
発　行　機　関	郡山市教育委員会
所　在　地	福島県郡山市朝日一丁目23番７号
発行年月日	令和７年(2025)２月28日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
横塚古墳群（よこづかこふんぐん）	福島県郡山市 横塚一丁目 80番２・81番１	2036	未登録	37° 23′ 43″	140° 23′ 50″	20240813 ～ 20240904	250㎡	住宅建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
横塚古墳群（よこづかこふんぐん）	古墳	古墳時代前期	円墳１基 土坑７基	土師器・縄文土器・石器	

要　　約	古墳時代前期築造とみられる径約11ｍの円墳を調査した。

住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査業務

横　塚　古　墳　群

――方八町・横塚地区遺跡確認調査報告書――

令和７年（2025）２月28日

編　集　公益財団法人郡山市文化・学び振興公社
文化財調査研究センター
〒963-0541　福島県郡山市喜久田町堀之内字畑田23番

発　行　郡山市教育委員会
〒963-8601　福島県郡山市朝日一丁目23番７号

印　刷　株式会社　坂本印刷所
〒963-0551　福島県郡山市喜久田町菖蒲池14-26